早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

概要書

現代メキシコ社会における
先住民アイデンティティのゆくえ
ーオアハカ州の ASARO による
ストリートアートを用いた「先住民」の再生産ー

The Future of Indigenous Identity in Mexico

Recreation of the “Indigenous” through the Street Art by ASARO

２０１５年１月

早稲田大学大学院　人間科学研究科

山越　英嗣

YAMAKOSHI, Hidetsugu

研究指導教員：　蔵持　不三也　教授

序章　スペイン植民地期を経て複雑な混血化が進む現代メキシコ社会において、先住民は形質的に区別し得る自明の存在ではなく、むしろ社会・政治的な構築物である。メキシコ革命以降、先住民は国家の形成・運営のための資源として利用されてきた。たとえば、1948年に設置された国立先住民庁は、先住民を「メキシコ国民」として国家に統合されるべき存在であるとする統合政策を進めた。多文化主義が謳われる現代のメキシコにおいても、先住民が独自の慣習と世界観を生きる共約不可能な存在であるという理解は依然として根強い。しかしながら、近年このような状況は変化しつつある。インターネットなど情報技術の普及が進んだ1990年代以降、サパティスタ民族解放軍の蜂起に代表されるように、先住民アイデンティティを主張する者たちが、自らのイメージを再構築し、世界に発信しようとする機運が高まりをみせている。本稿は、メキシコ南部の小都市オアハカにおいて、このような社会的に構築されてきた先住民イメージを、壁画やステンシル・アートといった、いわゆるストリートアートの表象行為を通じて脱構築しようとする若者アーティストたちの活動を事例とした。オアハカにはストリートアートを実践する集団が複数存在するが、本稿ではオアハカ革命芸術家集団（Asamblea de Artistas Revolucionarios de Oaxaca、以下、ASAROと表記）の活動を中心とした。

第１章　クラウディオ・ロムニッツは、現代メキシコのナショナリズムをグローバリゼーションへの対抗的現象として理解したが、本章ではこれに反証した。近年オアハカでは、長期独裁政権の制度的革命党（PRI）の力が減退し、社会運動が頻発している。ストリートアーティストたちは、2006年に生じた抗議運動を契機として州政府への抗議メッセージを公共空間に描き始めた。歴史を振り返ると、メキシコでは公共空間と視覚表象物が深い結びつきを有してきた。壁画やモニュメントは、ナショナル・ヒストリーを可視化する役割を担ってきた。これは、メキシコの「周縁」に位置づけられるオアハカでも同様である。

オアハカのストリート空間では、2000年代頃から米国のサブカルチャーの影響を受けた若者たちが、自分たちの世代の価値観や政治的主張をストリートアートとして公共空間に描くようになった。彼らは先住民や革命の英雄などをモチーフとしたが、それはナショナル・ヒストリーで産出されたものとは異なる「物語性」を有する。たとえばASAROは、サパタやフアレスを、ポップアートやパンク文化を援用することによって、PRI政権や権力者たちを批判するような作品に仕立て上げた。先住民や革命の英雄の引用は、グローバル化に対抗するナショナリズムの高揚という理解ではなく、むしろ再生産されてきたナショナル・ヒストリーを若者たちの価値観で「読み替える」実践であるといえる。

第２章　本章では、組織としてのASAROが有する思想が、どのように変化していったかを、「プエブロ」（pueblo）を鍵概念に検討した。黒田悦子によれば、プエブロは「民族的固まりから国にまでいたる広がりをもち、個別の独立性を内包している」という。当初、ASAROは組織にこのプエブロの概念を取り入れてオアハカのローカルな問題に目を向けてきたが、やがてオアハカ州外のことにも目を向けるように変化していった。

第３章　抗議運動後のASAROと彼らの生産する作品が、メディアを媒介することでどの

ように象徴化されたのかを考察した。抗議運動後、左翼主義者たちは、民衆がオアハカの街を一時的に占拠した出来事を輝かしい民衆自治の達成として称賛し、ユートピア化した。この現象を本稿では「神話化」と呼んだ。ASARO は活動の場を地元ギャラリーにも広めようとしたが、彼らの強い風刺性に注目したのは、むしろ欧米のキュレーターたちであった。彼らは ASARO の作品を「抵抗のアート」や「草の根民主主義の実現」と評した。国外での ASARO の評価の高まりは、やがてオアハカ内部での再評価をもたらした。州政府に属する文化事務局は、ASARO にイベントへの参加を打診し、接近を行った。しかしながら、この背景には民主的な対話を行う開かれた文化事務局をアピールし、人気の高い ASARO を、「神話化された抗議運動」の物語のもと文化資源化しようという思惑が見える。やがて、ASARO 内部にも変化が起きた。メンバーたちは美術学校を卒業し結婚などを機に家庭をもつと、これまで以上に金銭収入を必要とするようになった。すると、作品のテーマはマンネリ化し、これまでの作品にみられたような先住民という言葉から想起されるイメージを裏切るような作品は少なくなった。これは、ASARO 自体がメディアに流布する言説に加担するような作品を作るようになってしまったためではないだろうか。

第 4 章　現在、抗議運動の記憶が遠のくと、ASARO は郊外村落の若者たちに経験や知識を引き継ぐ必要性を感じるようになった。本章では、ASARO が 2013 年市内で実施したワークショップを事例に、若者たちが ASARO をどのように認識しているのかを論じた。その結果、若者たちは ASARO を外部社会への窓口として捉える側面と、伝統に向き合う場として捉える 2 つの側面があることがわかった。彼らは、外部社会に象徴されるグローバルな文化に対する強い好奇心を抱いているが、村落の伝統的価値観などの自文化を否定的に捉えているわけでもない。これは彼らの育った 1990 年代が、グローバル化の負の側面が見え始め、学校などでも自文化の尊重が盛んに説かれるような時期であったためと考える。

終章　考察にあたって、「グローバル化」という認識からいったん離れ、歴史学者ヘイドンホワイトの「現代とは、過去と折り合いをつける時間である」という言葉をもとに再考した。メキシコの社会運動で、「革命」という言葉がたびたび持ち出されるように、メキシコ革命は運動の担い手の正統性を担保し、現在の不正を律するためのキーワードとして繰り返し現代に現れる。私がこれまで調査を行ってきたなかで、オアハカの人々は二種類の「過去」を生きていることを感じた。一方では、国家が描く先住民像や英雄像のように、民衆の統合シンボルとして国内外に発信されるような、為政者によって客体化された「過去」である。もう一方は、先住民村落の若者が祖母から聞いたサパタの話のように、記憶のなかで語り継がれる自文化の起源神話としての「過去」である。客体化された過去は、起源神話としての過去の存在なくしては統合シンボルとなりえない。逆に起源神話としての過去は、可視化された統合シンボルとしての過去の存在によって、記憶の再認識・再編成が行われる。つまり、両者は互いに支え合いながら、革命の記憶を現代に生きるものにしているのだ。ASARO はメキシコ革命で想像された「来るべき未来」が、いまだ到来していない現在の不正を糾弾するために、革命の担い手としての「先住民」を再生産している。